

統一

第五百五十二號

明治三十年二月二十四日 第三種郵便物認可 (每月一回)
明治三十年九月十五日發行 統一 第五百五十一號 (十五日)

發行所 東京淺草區南橋 (原野村全館) 統一團

目次

日蓮上人に對する研究に就て
 質議 應答
 十法界抄講義 (完結)
 失題
 千葉縣本宗各教區布教師に東す
 宗務廳錄事報
 雜報
 教學財團公告

本多日生
 阪本日桓
 般篋堂
 舟

日蓮上人に對する研究

に就て (承前)

(早稲田日蓮研究會第二回講演)

本多日生

日蓮上人に對する研究には、主義と人格との二大方面ありて、その人格の方面には個人性と社會性を見、又個人性には智情意の調和の高度の發達を説いて、先づ智見を畧述いたしました。これよりは感情の發達に就いて辯明する考へてあります。

上人の傳を播くならば、その幼時房州片海の海濱に漁師の子供等と頑是なき遊びの折に、魚介をさいなみ苦むるを見て、無益の殺生を誡め給へる一節があらう、この一事已に上人が慈悲の情に富ませられて居つたことが分かると思ふ、又後年身延に隱栖せられてよりは前後九ヶ年の長きに亘り毎朝山嶺に登りて、房州の方向に向ひ父母の事を戀ひさせ給ひ、追祐の廻向愈り給はず、後に之を思親問と稱せる由を記るせり、この一節孝養の御志如何に深かりしを窺ふに足る。

之を上人の遺文に徴するも、感情の發達を證明するところ枚擧に遑なき有様である。

父母に對しては「父の恩の高きこと、須彌山猶ひさし母の恩の深きこと、大海還つて淺し、相構へて父母の恩を報ずべし」(道一三六七)と示され、殊に母に就いて「父母の御恩は、今初めて事あらたに申すべきには候はねども、母の御恩の事、殊に心肝に染みて貴くをばへ候飛ぶ鳥の子をやしなひ地走する獸の子にせめられ候事、目もあてられず、魂もさねぬべくをばへ候、其れにつきても、母の御恩忘れがたし」(道一九八)、「一代聖教を檢へて、母の孝養仕らんと存じ候、問母の御訪ひ申させ給ふ人々をば、我身の様に思ひまいらせ候へばあまりにうれしく思ひまいらせ候」(道一九九)と記るされて、雀が子に食を與ふるを見て、獅が子に乳を飲まするを見ても、他の人々の母の訪ひするを見ても、我母のこと思ひ出させられて、感泣し給ふのである、「今此のあまのりを見候て、よしなき心思ひ出て、うかつらし、片海市河こみなとの磯の邊りにて、昔し見し

あまのりなり色形味もかはらざるが、など我父母替
 らせ給ひけん、かたちがへなる、うらめしさに涙押へ
 難し」遣一〇八九と、「今この聖語を拜すれば、或る信者
 より海苔を供養しけるに、父母の事を追憶して斯くは
 嘆げかせ給ひつるか、感情の如何に高度の發達をなせ
 るかは、この一文にても推知せらるゝのである
 更に師に對しては、如何なりしや「花は根にかへり、
 眞味は土にとまゐる、此の功德は故道善房の聖靈の御
 身にあつまるべし」遣一五二〇と、報恩抄の結文に書さ
 給へるは、上人が精練の教觀、奮闘の淨行、凡べての
 功德をば、己が師に捧げ給ふ、「坊は十間四面にまた、
 ひさし、さしてつくりあげ、二十四日に大師講、并に
 延年、心のごとくつかまつりて、二十四日の戌亥の時
 御所にすゑ集會して、三十餘人をもつて一日經かさま
 いらせ、並びに申酉の刻に御供養すこしも事ゆへなし」
 遣二〇八〇と、この文を拜すれば、上人は本化獨歩の宗
 旨を開創せられたなれども、身延に隱退の後に至
 りても、その淨室の落成するや、直ちに天台智者のた

めに、報恩會を嚴修し給ふたのである、師恩に對する道
 義的感情の厚かりしこと以て知るべきものであります
 「予既に六十に及び候へば、天台大師の御恩報じ奉らん
 と仕候あいだ、みぐるしげに候房をひきつくる
 候とき、さくれうに、たろして候なり、錢四貫
 をもちて、一關浮提第一の法華堂を造りたりと、靈山
 淨土に御まいり候はん時は、申しあげさせ給ふべし」
 遣二〇七四と、潑瀾たる感情、今猶文に聲あるを覺ふ
 又た門弟擅越に對する感情は、如何にありしぞ、「日蓮
 を不便と申しぬる弟子どもをも、たすけがたからん事
 こそ、なげかしくは覺候へ、いかなる事も出來候は
 ら、是へ御わたりあるべし見奉らん、山中にて共にう
 ぬ死にし候はん」遣二一九五と悲痛の情、斷腸の思あり
 「今月七日さどの國へまかるなり……今夜のかんずる
 につけて、いよく我身より心くるしさを申すばかりな
 し、ろう(宇)をいてさせ給はゞ、明年の春かならずさ
 たり給へ」遣六九二、「日蓮は明日佐渡の國へまかるなり
 今夜のさびさに付けても、ろうのうちのありさま、思

ひやられて、いたはしくこそ候へ」遣六九五と、この兩
 文を拜しますれば、上人自身の御流罪は如何にもあれ
 我親愛の法師等が土籠に囚はれて、寒氣に苦めるを思
 ひやらせ給ひては、心くるしさを申すばかりなしと云ひ
 いたはしくこそ候へと書かれてあります、他面に透徹
 玉の如き知見と、剛毅體よりも堅き意志とを有し給ひ
 し上人も、愛弟六人がこの土籠に在るの悲痛に打たれ
 給ひし感情は如何ばかりなりしか、我等もこの文を拜
 する毎に、暗涙を禁じ得ぬ次第であります
 上人は更に門弟の事に就いて述べ給ふ、「總じて日蓮が
 弟子は、京にのぼりぬれば、始はわすれぬやうにて、
 後には天魔つきて物にくるう、せう房が如し……ねづ
 みが、かはほり(編綴)になりたるやうに……田舎法師
 にもあらず、京法師にもあらず」遣二二五と、堅實なる
 道念の必要を説いて、痛切なる誠告を與へ給ふ所、愛
 弟の熱情流露せるを見る
 上人が船守彌三郎に對して、「夫婦二人は教主大覺世尊
 の生れかはり給ふて、日蓮をたすけ給ふか」遣四一四「た

とひ男はさもあるべきに、女房の身として食をあたへ
 洗足てうす其外さも事ぬんごろなる事、日蓮はしらす
 不思議とも申すばかりなし」との感謝を述べ給ひ、又四
 條金吾に對して、「返す返す今に忘れぬ事は、頸切られ
 んとせし時、殿は供して馬の口に付いて泣き悲しみ給
 ひしをば、如何なる世にか忘れなん、設ひ殿の罪深くし
 て地獄に入り給はゞ、日蓮を如何に佛になれと、釋迦
 佛誘させ給ふとも、用ひ遣らせ候べからず」遣一六四四
 「日蓮は少きより今生のいのりなし、只佛にならんとを
 もふ計り也、されど殿の御事をば、ひまなく法華經、
 釋迦佛、日天に申す也」遣一六三四と、上人が四條氏に
 對する熱愛の情、眞に迫られるを見る
 又乙御前の母に與へ給ひし御文章には、「御勸氣をかほ
 ひりて、佐渡の島まで流されしかば、問ひ訪ふ人もな
 かりしに、女人の御身としてかたがた御志ありし上
 我と來り給ひし事うつゝならざる不思議也、其の上
 さのまうて(壽)又申すばかりなし」遣二一九一と、配る
 し給ひて衷心より歎びを述べられて居る

この他女性に對しては、殊に情緒絶々として、如何にも感情の上に生ける信仰を示されて居ります。「七月二十七日の申の時に阿佛房を見つけて、尼とせんは、いかに、こう入道殿は、いかにと、まづとて候ひつれば、いまだやまず、こう入道殿は同道にて候ひつるが、わせ(早種)はすてにちかづきぬ、こ(子)はなし、いかにがせんとして、かへられ候ひつると、かたり候ひし時こそ、盲目の者の眼のあきたる、死し給へる父母の閻魔宮より御をとづれの夢の内にあるを、ゆめに悦ぶがごとし」遣一七六一と、阿佛房の妻千日尼に申し送り給ひぬ、同じ千日尼に對して、「天月は四萬由旬なれども、大地の池には須臾に影浮び、雷門の鼓は千萬里遠けれども打てば須臾に聞てゆ、御身は佐渡の國にれはせども、心は此の國に來れり、佛に成る道も此の如し、我等は穢土に候へども、心は靈山に住むべし、御面を見てはなにかせん、心こそ大切に候へ、いつか(早晩)いつか釋迦佛のをしませず靈山會上にまひりあひ候はん」遣一八六と、凡夫の情緒と信仰の情操とを調和して、温か

き相思の心より菩提の道を教へ給ふたのである、又妙心尼に與へ給へる御文章を拜すれば、「さるは木をたのみ、魚は水をたのみ、女人はおとこをたのみ、われのをしきゆへに、かみをそりて、そてをすみにそめぬ、いかてか十方の佛もあわれませ給はざるべき」遣一七六七と、記るして夫を想ふ女性の愛情より出て、道に入るを稱歎し給ひ、又妙法尼に對しては、「ふぢのはなの、さかんなるが、松にかかりて、思ふ事もなきに、松のにはかたふれ、つたのかさにかられるが、かきの破れたるが如くにをばすらん、内へ入れば主なしやふれたる家の柱なきが如し、客人來れとも、外に出て、あしらうべき人もなし、夜のくらさには、ねやすさまじく、はかみみれは、しるしはあれども、聲もさこへず」遣一七八と、これは夫に別かれし女性の心狀を思ひやらせ給ひての同情の文であるが、こゝにも上人が感情のやさしさを示して居るではありませんか又子に對する親の愛情を記るし給ふを見れば、「法華經流布あるべき、たねをつぐ所の、玉の子出て生まれん

目出度覺へ候ぞ、……幸なり幸なり、めでたしめでたし」遣一七七一、「所願しをのさすが如く、春の野に花の開けるが如し……あらめてたや、あらめてたや、御悦び推量申候」遣一六七と、この文は四條金吾の夫妻に送られたのである、又上野殿の母に與へ給ふ書には、「去年の九月五日故五郎殿のかくれには、いかになりけると、胸うちささぎて、ゆびをりかずへ候へばすて、に二ヶ年十六月四百餘日にすぎ候が、それには母なれば、御おとづれや候らひ、いかにまかせ給はぬやらひ、ふりし雪も又ふれり、ちりし花も又ささぎて候ひき、無常ばかり、またもかへり、さこへ候はざりけるか、あらうらめし、あらうらめし、餘所にても、よき、さくわんかな、さくわんかな、玉のやうなる男かな男かな、いくせ、をのうれしさをばすらんと、み候ひしに、満月に雲のかゝれるが、はれずして山へ入り、さかんなる花のあやなく、かせにちるがごとしと、あさましくこそ、をばへ候へ……母よりささに、げざん(見参)し候はん、母のなげき申しつたへ候はん」遣一八二と、

同じ女性に對して、「今年九月五日、月を雲にかくされ花を風にふかせて、ゆめか、ゆめならざるか、あわれひさしきゆめかなと、なげきをり候へば、うつゝに、にて、すてに四十九日、はせすぎぬ、まことならば、いかにがせん、さける花はちらずして、つぼめる花のかれたる、をいたる母は、とゞまりて、わかきこは、さりぬ、なさけ、なかりける無常かな、無常かな」遣二〇〇と、「此六月十五日に見奉り候ひしに、あはれ肝ある者哉、男也男也と、見候ひしに、又見候はざらん事こそ、かなしくは候へ、さは候へども、釋迦佛、法華經に身を入れて候ひしかば、臨終目出度候ひけり、心は父君と一所に靈山淨土に參りて、手とり頭を合せてこそ、悦ばれ候らめ、あはれなり、あはれなり」遣二九八〇と、幾々綿々の情、讀むものをして泣かしむるの力ありと覺ふ

又檀越より御供養を捧げたるに對しては、教養信仰の御教訓の外に、感情の喜びを述べ給へる節、なか／＼に多きやうに、見受けらるゝのである、今一二の文を

擧ぐるならば、「むぎ、ひとひつ(二)河(三)のり五條、はじかみ六は給ひ畢へぬ、いつもの御事に候へば、をどろかれず、めづらしからぬやうに、うちをばへて候は、ばむふの心なり、せけんそうそう(註)なる上を、みや(天宮)の、つくられさせ給へば、百姓と申し、我内の者と申し、けち(飢渴)と申し、ものつく、(物作)と申し、いくそばく(許多)いとまなく御わたりにて候らん、山のなかのすまゐ、さこそと思ひやらせ給ひて、鳥のかい子(鳥)を、やしなふが如く、燈に油をそふるがごとく枯れたる草に雨のふるが如く、うへたる子に乳をあたふるが如く、法華經の御命を、つがせ給ふ事、三世の諸佛を供養し給へるにてあるなり、十方の衆生の眼を開く功德にて候べし、尊しと申す計なし」道二七七と、山のなかのすまゐ、さこそと思ひやらせ給ひて、との一句、感情の力を見らるゝと思ふ、又「日蓮が庵室に晝夜に立ちそいて、かよう人もあるを、まどねさんとせしめしに、阿佛房にひつ(置)れしをわせ(負)夜中に度々御わたりありし事、いつの世にかわすられむ、只

更に上人は敬者に對しても憐愍の情を起し給ひ、却つて之を善知識とまで思召すのであつて、その感情の發達せるを窺ふに於て、敬服に堪へぬ次第であります、彼の松葉ヶ谷の庵室に、頼綱が下知して押寄せ、少輔房が上人懐中の法華經を以て、打擲せし時の如き真にその感情の發作を窺ふに於て趣味ある研究と思ふ「少輔房に、つらをと、うたれしかども、第五の巻を以てうつ、うつ杖も第五の巻、うたるべしと云ふ經文も五の巻、不思議なる未來記の經文也、されば、せうぼうに日蓮、數十人の中にして、うたれし時の心中には、法華經の故と思へども、いまだ凡夫なれば、うたて(註)ト(あ)まりなり、面白くな)かりける間、つるをも、うばひ、ちからあるならば、ふみたり、すつべき、ことぞかし、然れども、つるは法華經の五巻にてまします、いま、をもひ、いてたる事あり、子を思ふ故にや、をや(親)のつぎの木(親)の弓をもて、學文せざりし子に、をしへたり、然る間此子うたてかりしは父、にくかりしは、つぎの木の弓、されども終には修學増進して自身得脱を

悉母の佐渡の國に生まれかわりて有るか……去る文永十一年より今年弘安元年までは、すべてに五箇年が間、此の山中に候に、佐渡の國より三度まで夫をつかはす、いくらはどの御心ざしぞ、大地よりもあつく、大海よりもふかき、御心ざしぞかし」道一七六〇と、この文にいつの世にかわすられん、と云ひいくらほどの御心ざしぞ、とあるを見ますれば、上人が檀越の供養に對しての感情のほども拜し上ることが出来て、これを讀まん僧俗は、自づとその感化を受けて、感情の向上を促がす次第であります

又元の學友、淨顯、義淨に對して記るされたることあり、各々二人は日蓮が幼少の師匠にておはします……日蓮が景信にあだまれて清澄山を出てしに、をひてしのひ出てられたりしは、天下第一の法華經の奉公なり後世は疑ひねばすべからず」道二五〇一と、只僅かに建長五年開教の時に、隱に助け申せし一事をば、二十餘年後の建治二年に至りても、斯くは感謝し給ふたのである

きわめ、又人を利益する身となり、立ち還つて見ればつぎの木をもて、我をうちし故也、此子そとば(卒塔婆)に此木をつくり、父の供養のために、たててひけりに見へたり、日蓮も又かくの如くあるべき歟、日蓮佛果をえむに、争か、せうぼうが恩をすつべきや、何に況んや法華經の御恩の杖をや、かくの如く思ひつゞけ候へば、感涙をさへがたし」道一八四二と、嗚呼上人が感情の高度の發達は、斯くも詳かに記るされたるか、又四思抄を拜すれば、教敵が法華經に背き、上人を迫害するに就いて、「大なる嘆きは、我れ一人此の國に生まれ、多くの人をして一生の業を送らしむることを嘆く」道四三三と記るされ、自身の迫害は、却つて之を大なる喜びなりとなし給ひ、「惡人無くして菩薩に留難をなすずば、いかでか功德をば増長せしめ候べき」道四二二と書かれてある、こゝにも感情の發達は示されて居るのである

更に自然界の美に對する感情としては、身延記等あり、「哀を催す秋の暮には、草の庵に露深く、檐にすたく、

さうがに(蜘蛛)の絲玉を連らぬき、蜂の紅葉いつしか色
深くして、たねだぬに傳ふ懸樋の水に影を移せば、名
にしれぬ龍田河の水上也、かくやと疑はれぬ」道二九七
と、その美的感情の發達は、明かに認めらるゝのであ
ります。

又更に佛陀に對し給ふても、極めて温かき感情を有し
給ふて居る。一凡そ其の里ゆかしけれども道たる縁なき
には、通ふ心もをろそかに、其の人戀しけれども、憑
めず契らぬには、待つ思ひもなをさりなるやうに、彼
の月卿雲客に勝れたる靈山淨土の行きやすきにも未だ
行かず、我即是父の柔鞭の御すがた見奉るべきをも未
だ見奉らず、是れ誠に袂をくだし(尊)胸をこがす嘆きな
らざらんや、暮行空の雲の色、有明方の月の光までも
心をもよほす思ひ也」道四七三と「戀ひて人を見たさが
ごとく、病にくすりをたのむが如く、みめかたちよき人
べにしるいもの(紅粉)をつくるが如く、法華經には、
信心をいたさせ給へ」道一八四四「釋迦佛は靈山より御
手をのべて、御頂をなでさせ給ふらん」道一八五九と

らざるも、秋風そよぶく今日此の頃は、眞に人生の何
者たるかに考へ及び申候

いつまでも一修養足らざる自己を反省するのみにて
は、せん方もこれなくと存じ候
私事は、此の日頃、少しは此の世の中に、あきらめ
もついたやうな、と考へ居り候ところ、先日病氣に相
なり(急に)、今少しにて往生いたすべきのところ、又
助かり申候、その時自分にたちかへり、つくづく考へ
申候が、どうしてまだ一安心立命どころに御座なく、
宗教の少しも考へたる今日と、何も知らぬ昔の我れと、
決して異なりたると御座なく候
さてその時の心の状態は

どうか助かりたい
れなじ死ぬなら、苦しまずに、苦痛なければ、ひし
ろ早く、かたづきてもよし、と
考へ申候、日頃何事に對しても、私は「運命だから、
しかたがない、これも佛様だか、神様だか、吾人達の
運命を左右するのだから、いくら、あせつたつて、し

「日蓮が頭には、大覺世尊かはらせ給ひぬ」道二九三と、
絶對の信仰にも、斯くの如く熱愛の情を有し給ひて、
生命あり光明ある信仰の模範となり給ふたのである
日蓮上人の所にても上人の感情は、調和的發達である
ことが明かてありますが、更に上人の社會性を研究し
たしますれば、ます一、最悪に堪へぬことが多いので
あります、これより意思の方面を説いて翻つて、上人人
格の社會性よりその調和的高度の發達を紹介する考
であります(次續)

信仰に關する質議應答

一、質議

秋の上葉の露落ちて、檐うら雨の音もかなしき、今日
此の頃、如何御暮し遊ばされ居り候や
或人の言に

私は詩人の泣くべき時、宗教家の悟るべき時、哲學
者の考ふべき時

とか、詩人ならざるも、宗教家ならざるも、哲學者な

かたもない、來るだけの運命は、既に作られてるのだ
から」と、せん方なしに、あきらめ居り候
梁川氏の病問錄には、これを消極的の悟とか
私の考へは、悟りだか、何だか、わがり申さず候へ
ども

けれど、第一士臺が作れていない故に、いつも、ふら
つき居り申候

いつまでも、ふらつき居り候て、自分ながら意久地な
いやうにも思ひ、又どこがと、いろ／＼考へ申候

生意氣のやうなれど、御聞き下され度
日蓮宗の人格的釋尊を即佛陀となす事につき、どう
しても分りかね候ふしこれあり候

今一ツは、因果の法にこれあり候
病氣後、或る機會にて、禪宗の人と語り候、又禪宗
につき、少々しらべ居り候、しらべると云ふ程には

これなく、只手あたり次第、ちよい／＼した分り易
いものを、讀み居り候が、自力、他力、の別はこれ
あり候へども、自性に於て佛陀を見、信仰によつて

佛性を得、別に異りたるふしもは候ぬやうなるに、
何故、上人は、禪天魔、と唱へられ候や、
まだ色々承りたり事候へども、後の便りにと、
ゆづり申候。

野村氏、霞の方も、寒くなれば、いたし方もこれなく
候まも、歸國いれすべく候、卒業後、家庭上の都合、
色々困り居り候、人間、なせかく、めんどうくささ
事のみ多きかと、愚痴もこぼし度候

廣島の妹も、此の頃参り居り候
昨夜も、八重子と、廣島の妹(鶴子)と、私と、三人に
て、世の中の事いろ／＼と語り候が、此の頃、伯母が
大病にて、一同心配いたし居り候に、昨夜又、賊にか
かりかけ申候(これは私の宅)、色々面白くなき事つ
ゝ候ま、八重子は

世の中なんて、詰らない、いつ死ぬかわからないし、
やれ賊だの、火事だの、洪水だの、大風だのと、心
配してばかり居なければならぬ、生てるんなんか、
一番詰らない

などと申居り候、鶴子は

だつて、しかたがない、なるやうにしか、ならない
から
と申候、私は

どうか、賊が来たつて、風が吹いたつて、火事だつ
て、生きたつて、死んだつて、かまはないやうに、
安心立命、を得て居たい
と、三人いろ／＼語り申候

人間、心と心と相通するものならば、此の頃の疑問を
の他を、東京と岡山、相隔たり居り候とも、相わかる
べき折りの候やもと存じ居り候

承り度きと、聞いて戴きたさよし、草々候へど
も今度はこれにて、後のたよりに

十月三日夜

致 磨

本多日生師様

一一、應 答

拜啓、本月三日御差出之御書狀に對し、御答返引謝入
候、小生事本月一日より本宗東部第二回講習會に出

席本日御品候次第にて、只今披見致 申候
先は御無事之段、何より目出度存候、御書狀を拜する
毎に、御面談致候様の威有之、殊に末文、心中の疑問
心相通じ候て、自ら解決の時もあるべきか、との一段
妙意成應、直ちに筆を取り、御答仕る次第、御疑問
水釋に至らず候は、幾たびにても折返し御質議被
下度及ばん限りは答釋可致候

先日御病氣にて、死生の間に出入致され候由にて、備
さに人生觀を試みられたる趣、而して其際の心狀直
寫致され候事、面白き御質議に存候、實際的、若くは
内省的研究は、尤も價值ある方法に御坐候

ドウカ助カリタイ、死スナラ苦シマズニ、苦痛ナケ
レバ、寧ろ早くカタクツキタイ

右様の心象浮び候趣き、尊き心狀に候、之に最大目的
の確立、即ち完全實在の信念ありたらんには、申分な
き次第に候

この完全實在と申すは、宇宙の現象を押しつめると、
そこに實在が横はつて、時と處に常住遍滿である、そ

れが生命ありて、智も悲も備はり、妙相ありて美缺く
るなく、力用ありて安固にして事辨せざるなし、之を
涅槃界の五果と申候

常 安 力 色 命 辨

この五果を常樂我淨とも申候、この形式を備へて、實
在を證ひれば、そこに佛陀を投影し得て、又その佛陀
の清度の慈悲と御力とを信じ、その御力の無限なるを
妙法蓮華經の上に將り來りて、その接觸を信じ、我が
渴仰信願の力は、内に存せる佛性の發現力と、上より
來るこの佛陀の妙力とが、妙法蓮華經を橋梁とし、連
鎖とし、救の綱とし、救の手とし、母の乳房とし、大
雲の法雨とし、良醫の良藥として、こゝに接合し、妙
觀し、佛陀の御心は、我等が信仰の心内に容ること、
月の清水に宿るがやうに、轉生の正因定まりて、一念

刹那の間に、今まで見つる思想體系は、あとかたもな
 くなりて、完全實在の實を光顯し、こゝに生命は、智
 慧の光明と、慈悲の温情とに充ち、形質は、三十二相
 の妙相美盡し、その力用は、諸の迷者を救ひ得て、安
 固にして他より動搖せられず、我が思ふ處を辨じて無
 碍なるの境界に安住せん、之を成佛と云ひ、最大目的
 の成辨と云ふ、この信念の決定を安心と稱し、信仰と
 云ふ、こゝに歡喜法悦は來りて、満足の心に懋めら
 れ、又この向上に資せんが爲め、若くは法悦の餘りに
 活動の生活は來るなり、哲學上よりは、之を完全實在
 と稱し、倫理上よりは、最大目的觀と云ひ、心理學上
 よりは、人格の完成と云ひ、佛教に於て成佛と申候
 この安心を確立致され候は、只南無妙法蓮華經の文
 字音聲は、佛陀との交接、救護の感通を得て、生々た
 る喜びの内に満足と活動とは、如何なる場合にも、我
 れに充ち可申候
 この域に至るには、人生の不完全、不如意は、却つて
 好箇の資料と相成可申候

次に運命觀に就て、一も二もなく運命と云ふ機械的因
 果説を取るは、佛出現以前の波羅門の一種、宿作因外
 道の見候、消極的失意の時には、一ツの慰安なるべ
 きも、佛陀は之を許し給はず、佛陀の慰安は、前記の
 通り最大目的の完成を信じて、向上的満足の上に人生
 の不完全を超越して來るもの候、宿作因とは、
 宿世の作業(シワザ)を原因として、機械的に人生の運
 命を見たるもの候、然るに佛陀は、之に縁の字
 を加へて、因縁の説を示されたり、縁は、助成縁、異
 熟縁など種々ありて、如何に原因あるも、之を助成す
 るもの、又妨害せざるものに於て發生すると、米を作
 るに、種米は因の如く、土地、日光、水分、肥料は、
 助成縁、雜草を取り去り、害虫を除くが如きは、異熟
 縁なりと、申され候
 又この縁によりて、因果の連絡に變化を來たすこと自
 由にして、我が意志の自由なるが如しと説かれて、意
 匠の因果、精神的因果を示されたり、之を定業をも轉
 ずと申候、この轉ずる所が愉快にて、道徳とか、宗

教とかは、この變化性に向つて、巧に改造を試むるも
 のに候、丁度教育學に、教育の可能と不可能とを説い
 て、遺傳は轉じ難さも、ろは少部分にして、他は變化
 せしめ得べしとなして、そこに教育を試み、自我發展
 を目的とするがやう、運命も變化の可能と不可能と
 に於て、不可能の部分は極めて少なく、變化し得べき
 可能の分極めて多しとするが、佛陀の大乘に示された
 運命觀にて候

第一の土臺は、哲學面には、實在觀念の確立
 道義面には、満足と活動(一歩は満足の地に安住し一
 歩は活動の地に進取すること)
 文學面には、自然と人生との調和
 宗教面には、佛陀の御力を明かに致され候て、満足と
 活動とを含有せる信仰を定め給へ
 日蓮上人の顯示し給へる、人格的の釋尊と申すは、前
 記完全實在の佛陀に候、その根據は、佛教の哲學面た
 る涅槃論の實在の土臺の上に立てるものにて、善量品
 の經旨は實に是れなり、是れ實に佛教の生命、吾人信

類の中堅に候
 因果法は、前記の通り、機械的のものにても、必然的
 のものにてもなく、精神的、自由的にして、而かもそ
 の内面を貫ける不變の眞理を指すもの候、因果法は
 哲學上、充足原理と稱し、論理學上、根本原理と稱し、
 佛教にては、正邪の標準と申候、邪見邪説は、何れか
 に正因縁ならぬ點あるもの候
 禪宗の實在觀念は、餘り抽象的であつて、不完全なる
 實在論に候、彼は虚空の如き實在か、又は汎神論に、
 庭前の柏樹子など申す、談理的實在にて、哲學的にも
 宗教的にも幼稚のもの候、高く聞ふるは、哲學も宗
 教も知らぬ素朴實在論者に御座候
 自力、他力と申して、二者全然別あるにあらず、兩者
 調和の力、協力融合の上に、之を認むべきもので、自
 力のみに傾くを自性痴と云ひ、他力のみに傾くを他性
 痴と申候、痴の字着眼すべき所、上人は、自力も定
 んて自力にあらず、他力も定んて他力にあらず、と申
 され候て、融合力、妙合力との意を示され候

聖語錄九十三頁、詳覽遊ばされ度候
佛性の具有を説くは、大乘佛教の通説なり、この點に於て上人は禪宗を破し玉はず、第一は、完全實在を知らずして、佛陀を輕視するが故に

聖語錄六九四、三行以下、同三三一、八行等に於てその意分明

第二は、佛教の原理的方面に於て、彼は色心實在互具のゆゑを知ら

聖語錄三〇五、三行、同八行等之を證す

第三、聖教を輕々視して、教外の邪見を生ずるが故

聖語錄六二七、九行、同六九七より七〇二迄詳覽あれよ

この他にも多く根據あれど、今盡すべきにあらざるを之、上人は統一主義なり、他は或は散漫か、混同の見なり

哲學上に三主義あり

(1) 混同説

哲學史に於ける諸説を混同して、長短錯雜せるもの

安明とは須彌山、八海も九山八海とて、須彌山説の大世界、その南は南閻浮提と云ふ、即ち今の五大洲なり

野村様は、北海風寒ふして御歸京のよし、又伯母様御病氣、御宅には盗人窺ひ寄り、心地あしき事多く候て姉妹三人の語り草、かき記され候事、尊き實驗談に有之

八重子様は、生きてるなんか、一番つまらぬと、申され

鶴子様は、なる様にしか、ならないから、仕方がない

御身は、生きなつて、死んだつて、かまわない様に、安心立命したい

この三方面の心的状態は、現代の思想界を代表せられ居る、社會人生觀の各方面と拜し申候、この手紙の最初に記したる、完全實在説により、佛の御力を信じ、因果法は、心に依りて變化せしめ、定業も轉ずる事、又この歡喜の信仰は、そこに満足と活動とを得、一步

(2) 折衷主義 その長所を綜合せんとして、何等批判の標準なきもの

(3) 批判的折衷主義 此は正確なる標準の下に、批判的に折衷を主義とするもの、上人は實にこの批判的折衷主義にして、即ち統一主義なり

この大主義より起りて、禪天魔の聖斷は下りしなり、萬古佛教史に光彩を放つべきは、上人の四大格言なりとす、猪金山を摺れば、牙折れて光耀益々揚かると、上人統一の明教、猪金山の如く然り

我師日容上人語あり

前 在 其 超 一 後 鳳 潭 古 今 緝 素 視 耽 々

金山猪倒 光 揚 偏 照 得 安 明 八 海 南 南

真超とは、元 上人の宗義に遊び、後に身を宗

外に置き、上人の教義に大反對を試みし人

鳳潭は、華嚴宗の大學者にして、上人の主張に

反對を試みたり

緝素とは、僧と俗となり、耽々とは、虎の怒り

てニラム貌

は安住、一步は進取、而して世の不完全、不自由、不満足、不平は、やがて又、最大目的を尊重せしむる助けとも相成、人生に對する尊き自覺發心となりて、厭世樂天を超越したる大樂天主義、満足に安んじたる活動、信仰の光に照されて進む戰場、世の面倒な事、それが社會性を發達せしめ、徳を積むの好資料、我が信仰の光には、如何なる苦痛失望の淵にも慰安あり、何時も満足、何時も活動、何時も法悦、何時も奮迅、如何にして暮すも死するも怠慢は第一の罪、奮勵は最大功德、我れは女子たりと雖も、志し剛、屈すべからずと、御決心遊ばされ候て、身も心も益々御健全に進ませられ、満足と活動の常に輝き渡らせられ候事を、我大慈悲の釋迦牟尼佛に祈り上候

東京と岡山と相隔り居り候事、何よりも心くるしく候御身は、すぐ手紙の書けるにも拘はらず、御手紙の参る事おそく、何時も我が法悦と満足とを傷け申候、今夜は近來になき喜びに充ちて、この返書をしるし申候この間中の講習會にて、宗内僧員が教學上を得たる所

は多大なりしを信じ候が、宗外の人にて會場より五里餘の處、日々演車にて來聴せられし白井女學校長（此人獨力にて資を擲ち、高等女學校程度の學校を建て、我々教育致され、已に七百人、卒業生を出され候由）大に感激致され、歸宗の上法弟となり、依て號を顯常居士と致し候、同氏の所感に

上人の御講座へ行く時

こひせじと、心のせきを、とぢつれど、

みのりのみには、うちやぶれけり

御主張をさゝてよめる

れぞろきて、あまのいはとを、あけ行けば

あらはれけりな、とこしへのかみ

書きしるし度事盡さず、夜のふくるまゝとてめ申候何卒御健全のほど祈り上候、小生は本月十六日名古屋に布教、廿四日千葉縣大法會に出席、廿八日頃宇都宮に布教可致候、日課は大歳披閱致居、佛教女性觀は、今正しく七分通り閑了致候、なか／＼愉快の事多く候前文の

我雖ニ女人一志剛不可屈 の句は

須摩提女經の文にて、須摩提女が異教徒六千の波羅門に迫害せられ、信仰を捨てずんば死あるのみの境遇にありて、異教徒の巨魁に向つて發せし確信の聲なり、之れに就いても面白き教訓あり、他にも多々ありて、御身に話せば如何に感興のうちに、人生觀の力とも相成事かと思ひ出て、は、人生のこと思ふにまかせぬ、一種の深痛なる教訓と相成申候皆様にドウカ宜敷、サヨナラ

四十年十月九日夜

品川灣頭

本多 日 生

玖磨子様

几下



十法界抄講義 (完結)

八十三老比丘 阪本日桓講演

第八回

無嫌爾前と云ふ文より下最可秘藏に至る五十一行二字は、第三重の難問の他家の答の非なるを破斥す、此の文分つて五段也、一に無嫌爾前と云ふ文より並常寂光に至る十四句八十六字は、二乗に約したる答の非なるを破斥し、二に明菩薩と云ふ文より實報寂光に至る二十句一百三十九字は、菩薩に約したる答の非なるを破斥し、三に然此三百と云ふ文より非是實斷に至る廿五行十字は、普迹本相待して爾前迹門の二乘菩薩の無得道を判じ、四に答文開善と云ふ文より有無非今難に至る十四句九十三字は他家の答を釋して反詰して難ず、五に但七方便と云ふ文より最可秘藏に至る十五句七十六字は、爾前迹門の觀心の有名無實を判じて本門事觀の眞實を顯さんが爲め金鐸論の文を隨義轉用して判ず已分文して御聽せ申したて有ます、是より隨文消

尺致しませす

無嫌爾前當分之益故説三界諸漏已盡過二百由旬始見我身又爾前入滅二乘實不斷見思故雖不出二六界迹門二乘作佛本懷故説而於彼土得聞是經既云彼土得聞故知爾前諸經無三方便土故實無實報並寂光一分文は上に辨ずる通り今此十三句八十六字の文を講じませうならば、予が第三重の難問に其許の答には、如來一代の聖教は皆衆生の機に應じて説きたる者なれば、爾前當分の教席に於て當分の利益ある事を嫌ひ斥ける筈無きが故に、二乗に對しては三界諸漏已盡とも又は過三百由旬とも説きて當分の得益を明し、菩薩に對しては始見我身を説きて華嚴會の時に入如來惠とて初住已上の位に登りたる事を明したれば、無益に説きたる教は一經もないと答へたるが、是れは其許の見解の足らぬと云ふ者なり、又爾前にて灰身滅智し入滅したる二乗は實には見思の惑を斷せず六道界の生死を出離したるには有らざれど

も、法華經述門は爾前にて永不成佛と嫌れたる二乗を
 作佛さするのが本懐なるが故に、而於彼土得聞是經と
 説きて彼の方便士に生れて是の法華經を聽聞して成佛
 の素懐を遂げさしたて有る、爾前の教には彼土得聞と
 説きたる經はなし、既に法華述門に於て彼土得聞と云
 はれたるてはなき乎、當に知れ、爾前の諸經には下劣
 なる方便士に生れたる人なきが故に、實に上勝なる
 實報土や寂光土に生れたる人は決して無きので有る、
 と破斥したる文で有ます

○明二菩薩、成佛→故、假立三寶報寂光、然二菩薩、具二
 乘→二乘、不レ成佛者菩薩、不レ可レ成佛也、不レ滿二衆生
 無邊誓願度、二乘ノ沈空盡滅、即是レ菩薩ノ沈空盡滅也、
 凡夫不レ出三六道者二乘、不レ可レ出三六道、向不レ明三下
 劣ノ方便士、況明三勝、實報寂光、實三斷二見思者何、
 不レ明三方便、菩薩實三至三寶報寂光何、無レ至三方便
 土、但云三斷無明、故、假立三寶報寂光、而無三上、
 二土、故、於同居中、假立三現、實報寂光、此の分文
 は上に辨したる通り、倍此の二句一百卅九字の文を講

せば、予が第三重の問難したる其答に、其許は爾前に
 於て菩薩が三惑を斷盡して成佛したるを答へたるが、
 それは實に成佛したるのではない、二乗の永不成佛に
 對して一往菩薩の成佛を明したるので有る、故に從來
 同居土に無き實報土や寂光土を假に建立し見せたるの
 で有る、然るに法華經には十界互具の妙法を説きたれ
 ば、菩薩に二乗を具し二乘に菩薩を具して能具の菩薩
 が成佛すれば、所具の二乘も俱に成佛を致すので有る
 爾前の諸經には十界互具の妙法を説かざる故に、菩薩
 は菩薩のみ二乘は二乘のみ凡夫は凡夫で孤立して居
 れば、二乗が不成佛なれば菩薩も不成佛で有る（菩薩不
 と云ふ、此の文は菩薩の四弘誓願の上求菩提も出來の云ふ義也）左すれば不レ滿二衆生無邊誓
 願度、是レ菩薩の四弘誓願の下化衆也、是の如く菩薩が四弘誓
 願のなきは無慈悲にして菩薩ではなく凡夫で有る、二
 乘の沈空盡滅は即是菩薩の沈空盡滅也（沈空盡滅とは永
 道の凡夫が六道生死を出でざれば、二乘も六道生
 死を出づべからざる者也、爾前の諸經には向不劣なる
 方便士に生れたる者すらなし、況や勝れたる實報土や寂

光土に生るべき人らあん乎、爾前に於て二乗が實に見
 思の煩惱を斷じたならば、何ぞ爾前の教に於ての方便士
 に生るゝ事を明さずして、法華經に來至し初て彼土得
 聞と説れたる乎、菩薩が實に三惑を斷じて勝れたる實
 報土や寂光淨土に至りたる者ならば、二乗が劣りた
 る方便士へ至る事無らんや、但し爾前に於て菩薩が無
 明の煩惱を斷じたりと云ふが故に、從來無き同居土に
 於て如來神力を以て假に實報土や寂光淨土を建立し
 て見せたので有る、爾前の方便の教にては四土殊一變
 婆即寂光と説かず、左すれば上勝の實報寂光の
 二土無きが故に、此の婆娑の同居土の中に於て假に影
 現の實報土寂光土を建立し見せたので、實に菩薩が成
 佛して眞實の實報寂光に至りたるのでは無き者也、
 と破斥したる文で有ます

○然、此ノ三百由旬、實無レ出三三界、述門、但、是、説
 於始覺ノ十界互具、未レ明於本覺本有ノ十界互具、故、所
 化ノ大衆、能化ノ圓佛、皆是、悉、始覺也、若、爾、者、本無今
 有、失何、得レ免、乎、當、知、四教ノ四佛、則、成、圓佛、且、

述門ノ所談、是、故、不、知、無、始、本、佛、故、無、始、無、終
 之義、缺、不、具、足、又、無、無、始、色、心、常住之義、但、説、は、是
 法住法位、者、未來常住、非、去過常也、不、レ、本、有、十
 界互具、無、三、本、有、大乘ノ菩薩界也、故、知、述門ノ二乘、
 未、斷、見、思、述門ノ菩薩、未、斷、無、明、六、道、凡、夫、不、
 住、三、本、有、六、界、有、名、無、質、故、云、此、の、十一、行、三、字、の、文、を
 消釋せば、然るに述門に於て過三百由旬と説きたる此
 の過三百由旬の文は、實に三界の生死の三百由旬を過
 て化作一城の方便士に住止したるのでは有ません、述
 門にては但だ是れ十九出家三十成道の始覺近成の佛が
 理具の十界互具の法門を説て未だ本門の如く久成の本
 佛が無始事本覺本有の十界互具の妙法を明さざる故に
 所化の大衆も能化の圓佛も皆是れ悉く始覺で有也、若
 し爾らば能證の人に約して談ずれば、所化の人も能化
 の教主も本と無き佛身を今始めて有つ事なれば、本無今
 有の失何を免る事を得乎、又所證の法に約すれば、述
 門の理具の十界は眞如の理より始めて生じたる者なれば
 本と無き十界が今始めて出來て有れば、本無今有の失何

を免る事を得乎、孰れにしても迹門の法門は本無今有の失は免る事は出来ません、當知爾前四十餘年の間に説きたる藏通別圖の四教の教主の四佛は、皆十界不具足の片輪の身軀三身各別の佛が、法華經の席に來至して十界具足三身圓滿の佛に成りたるを説きたるは、且く迹門の所談也、是の故に迹門の佛は我が身が無始本有無作の佛軀なる事を知らず、故に迹門には事の十界の無始本有の義と事の十界の無終の義が缺て具足せず又迹門には無始本有の十界の色心事常住之義を説きたる事無し、但し迹門に於て是法位法位と説きたるは未來常住の事を明したる經文で有つて、是れは過去常住を明したる文にては非ざる也、今此の文を少々辨を加へて説明しますれば、是法と云ふは十法界の諸法の事有ます、法位と云ふは眞如の妙理の事有ます、住の一字は能住の住と所住の住の二義が合藏して有ます、偕て是法の十法界は法位の眞如の妙理より生じ、還て眞如の法位に住す、是れは能住の人で有ます、法位の眞如は還て是法の十法界を住せしめて未來に常住

ならしめたり、是れは所住の位階で有ます、此の是法の十法界の世間相をして未來常住ならしめたるは法位の眞如の功で有ます、所住の眞如が常住なるが故に能住の十法界が從て常住なるので有る、故に但説是法住法位者未來常住非是過去常住也と判じたるので有ます、宗祖の正意は一部唯迹本迹一致の法華は事の十界無始本有の過去常住の實義を説かざれば、説へ是法住法位世間相常住と説て未來常住の無終の義を明すといへども、尅して論ずれば此の無終の義も眞實の無終にはあらず、實は上に判ずる如く迹門は無始無終之義缺不具足の有る、今は一性與へて迹門に未來常住を明したりと判じたるので有ります。○不顯本有十界互具無本有大乘菩薩界一也文此二句の文を講ずれば、無始本有の事の佛界は無始本有の本果妙の佛で有る、無始本有の事の九界は無始本有の本因妙の菩薩で有る、此の本果妙の佛界に本因妙の九界を具し、本因妙の九界に本果妙の佛界を具したるが、眞の無始事常住の十界互具で有る、此

の眞の十界互具を説き顯さざる迹門の佛は無始本有の九界の大乗本因妙の菩薩界を具せざる不具足の佛也と破斥したる妙判也、偕て聽講の諸君よ、今此の文を講じたるに因て宗祖所判の眞の十界互具事の一念に事の三千の諸法を具したる法軀を辨じて聽かせ置きたいのて有ます、久遠實成本佛の釋尊所顯の事常住の十界互具一念三千の法軀なる者は、迹佛の所證の如き非長非短の實相の妙理を法軀とするのでは有ません、無始已來法界に有るとし有らゆる十界の人の未だ聞法し佛種を心田に下さざる理即の人の身軀が、取りも直さず無始の報應事常住の古佛にして、能攝の理即の人にも所攝の非長非短の實相の理も此の事理の二法ともに無始より成佛し居るので有る、左すれば釋尊が本因本果實修實證も無始已來の本因本果實修實證にて、五百塵點切の往昔初めて本因を實修し本果を實證したる者では有りません去れば無始已來法界に有らゆる未聞法未下種の理即の十界の諸法が十界互具眞の事の一念三千の法軀で有ます、此の法軀の中に非長非短の實相の深理

が前後なく攝收して有るので有ます、如是の妙法を釋尊が五百塵點切の往昔實修實證したる者で有ります、他日又た委悉に辨明して聽せませう

第九回

故知迹門二乘未斷見思迹門菩薩未斷無明六道凡夫不住本有六界有名無實此の七句三十二字の文を講せば、故に知迹門に於ては無始本有の事の十界互具一念三千の妙法を説かざれば、有名無實の十界互具にして二乘も餘法を具せざれば見思の煩惱を斷じて六道の生死を出る事なし、菩薩も餘法を具せざれば無明の惑を斷じて實報寂光に至る事もならず、六道の凡夫も本無今有の凡夫にして無始本有の六道界に住せざれば成佛の望み絶へたるなり、必竟迹門所談の十界の斷惑證理は有名無實なる者也、と破斥したる文也

故至三浦出品爾前迹門斷無明菩薩說五十小劫謂如半日是則迷於壽量品久遠圓佛非長非短不二之義故爾前迹門斷

惑者如外道有漏斷退又起以未久遠而爲惑者本也此の十一句六十九字は爾前述門の菩薩の惑者なる證據を擧げて破斥したるて有ます、今此の文を講じますれば、爾前述門の文殊普賢彌勒藥王藥上等の迹化の居士の惑者なる證據には、本門涌出品の法席の時本化の大地涌千界の菩薩達が種々の讚歎の妙法を以て本地久成の本佛の御徳を讚美奉し時間が五十小劫の長時間で有つた、是時本佛の釋尊默然として聽ておいて遊ばした、一會の諸の四衆の人々も亦皆默然として聽聞して居た、其時間が五十小劫の長時間で有しを、本佛の釋尊が神力を以て文殊彌勒等の迹化の菩薩をして僅に半日の短時間の如くに謂はしめたるを五十小劫謂如半日と申すて有る、本化の居士は解者なれば本佛の久遠實成なる事を信して五十小劫の長時間佛を讚美した、迹化の居士は惑者なれば執近の情深き故に長時間に堪へざる人々なれば如來神力を以て半日の如に謂はしめたるので有る、其所以は執近の短時間の迷情を破して遠本

ざるが惑者の本て有る也と破斥したる妙判て有る故四十一品斷彌勒不知本門立行發起影向當機結緣地涌千界衆生既斷一分無始無明而得十界一分無始法性何知二等覺設不知三等覺菩薩爭不知當機結緣衆乃不識一人之文最未斷三惑故歟是以至本門則於爾前述門加隨他意釋又攝天人修羅說貪着五欲妄見網中爲凡夫顛倒釋文云我坐道場不得一法藏通兩佛見思斷別圓二佛無明斷並不斷見思無明故云隨他意所化衆生謂斷三惑非是實斷此文此の十行九字の文は本化迹化相待して解者惑者を判したる文て有ます、今此の文を消釋せば、爾前述門の菩薩は惑者なるが故に四十一品斷の彌勒菩薩（圖教所斷の無明の惑者の無明を十住十回十等と云ふ四十品にて、四十一品斷の彌勒と云ふの位に登りて一品の無明を斷したるが故に、四十一品斷の彌勒と云ふので）が法華本門の立行の發起衆、影向衆、當機衆、

の長時間を顯さんが爲めに神力を以て謂如半日の思をなさしめたる有る、是れは之れ壽量顯本の機を熟したるを以て涌出品に於て斯く神力を顯したるのて有る、然る後に壽量品に至て破迹顯本し壽命長遠の説を聞て増道損生の利益を得たるのて有る、壽命長遠の説を聽く機のなき衆生は、佛が靈山にて八ヶ年間法を説きたると思へるのみて有る、本佛釋尊の所證は十界の諸法は無始無終本有常住の妙法にて、無始なれば遠の論すべきに非ず、無終なれば近として説くべきに非ず長短一轉不二と達觀したるは佛眼觀て有る、此の事の十界の無始無終本有常住非長非短一体不二の妙法之義に迷ひたる爾前述門の文殊彌勒等の迹化の居士の斷惑證理は有名無實にして、例せば外道の輩が三界有漏の四禪等を修して見思を斷じたりと思ひしも、其定を退きて修せざれば又た煩惱が發起すると同例にして有名無實の斷惑て有る、それと云ふは爾前述門の菩薩は久遠實成の本佛所證の無始無終本有常住の十界にして、此の事の十界各々事の十界を具したる妙法を未だ知ら

結緣衆の地涌千界の衆生の中に於て當機衆と結緣衆とは四十二品の内の一分無始の無明を斷じて十界一分の無始の法性（實相の理を法性と稱したるではない）を得たる下位淺劣の人々をも知らざれば、何ぞ四十一品斷の發起影向の等覺高位貴顯の人々を知ん哉、説ひ此の人々を知らずとも争てか下位淺劣の當機衆や結緣衆を知らざらんや、所が乃不識一人として一人も知らざるは最も未斷三惑の凡夫の證據て有る哉、是を以て法華本門の法席に來至して則爾前述門諸説の教に於て隨他意方便の判釋を加へたるのて有る、又壽量品に於ては爾前述門の菩薩を天人阿修羅の凡夫の仲間と攝せられたるのて有る、依て貪着五欲妄見網中爲凡夫顛倒を説く、文句九卷の尺の文に我坐道場不得一法と云ふて、七方便の人の開悟も二乘の人の有餘無餘の二の涅槃も實も涅槃にあらず、一法として實の悟を得たる者なしと云はれたり、左すれば三藏教通教兩佛の見思斷も、別教圓教二佛の無明斷も並に皆見思無明を斷したるのではなきが故に隨他意方便の教と云はれ、能化の佛が是の次第な

れば所化の文殊彌勒等の三惑を斷じたりと謂へるも、是は眞實の斷惑には非らざる也と破斥したる文て有ます、次に答、文、開善ノ無聲聞ノ義同、者汝亦同、光宅ノ有聲聞ノ義、歟天台ノ有無共、破也、開善者於爾前判、無聲聞故、光宅於法華判、有聲聞故、有無共有、難、天台爾前則有、今經則無、所化、執情、則有長者見、則無、如此、破文、皆是、爾前迹門相待、釋、有無共、非、今難、此の十五句九十三字は第三重の問難の答の聲聞の有無の文を讀して反詰して破斥したる文也、今此の文を消釋せば、其許は第三重の問難の答に、予を以て開善師の無聲聞の義に同ずると難じたるか、然らば其許も亦光宅師の有聲聞の義に同ずるてはなら歟と反詰して難じ其所て天台師は文句開善の無聲聞も光宅の有聲聞も皆非義なれば破斥したるのて有る、如何となれば開善師は爾前に於ては實行の聲聞は無しと判じ、光宅師は法華の座に實行の聲聞有りと判じたる故に、それは間違

た話しだ爾前には實行の聲聞が有る法華の會坐には實行の聲聞は無い、所化の人の執情には自ら我等は客作の賤人なりと思ふが故に有り、長者の佛の實智を以て往て見るに、子實吾子にして一佛乘の御子なれば客作の二乘はない、と天台師は古師の非を破されたるのて有る、如此の破斥の文は皆是れ爾前迹門今昔相待の釋にして有無を判じたる也、今は本迹相待の場所なれば爾前迹門の聲聞の有無の難には與かるに非らざるを破斥したる文て有ます、但、七方便並非究竟減又、但言觀心即不稱理、釋、者對圓益二下、當分、益云、並非究竟減即不稱理也、者金錍論、偏指清淨眞如、尙失小眞、佛性安、在、釋、云何可會、但此尙失小眞、釋、常不可出最可秘藏、此の十四句七十六字は爾前迹門の觀心の力にては當分の得益に與る能はず、本門事の一念三千妙法の觀心でなければ眞實の得益に與る譯にはゆかね事を、金錍論を引て隨義傳用して判じたる文て有ます、今此の文を消尺すれば

但七方便並非究竟減等の文は一往開教の大利益に對して爾前當分の得益を下したるのみにて、決して得益なしと云ふのではないと答へたるが、それならば金錍論に、偏に清淨の眞如の理のみを觀じては小乘教所詮の眞空の理すら悟る事はならぬ、依て苦集の妄心に托して眞空の理を悟らねばならぬ、苦集の妄心を離れては眞空の理の托する所がない、と述したる文は如何會通なさるや、必竟本門の觀心の如く十界事の一念に事の三千の諸法を具する妙法の觀心でなければ、眞實の得益は出來ぬのて有ると、爾前迹門の觀心を破斥したる文て有ます、但し此の金錍論の尙失小眞の文をば常途の今昔相待の日には出さず、彌々實義の本迹相待して成佛の有無を論ずる時に出すべき也、それ迄は最も秘藏し置べき法門也、と判したる文て有ます、但以、妙法蓮華經皆是眞實、文、於迹門、許、爾前得道故、有、爾前得道、義、此、是迹門、對、爾前、說、眞實、而未顯、久遠實成、是則得、未顯眞實、分域也、所以無量義

經大莊嚴等、菩薩、舉、四十餘年、得益、佛答、以未顯眞實、言、又涌出品、彌勒疑、云、如來爲太子、時出於釋、宮、去、伽耶城、不遠、始、過、四十餘年、佛答云、一切世間天人及阿修羅者、謂、今、釋迦牟尼佛出釋氏、宮、去、伽耶城、不遠、得三菩提、我、實、成佛、已、來、已、我、實、成佛、者、非、云、壽量品、已、前、未、顯、眞、實、哉、文、此の十行四字は經文を引き破迹顯本して爾前迹門の無得道を判じたる妙判て有ます、先づ此の文を消釋しますれば、其許は予が第三重の問難の答へに、迹門に於て二乘の人の爲めに過三百由旬と説て爾前當分の得益を許し、また菩薩の爲めに始見我身開我所説即皆信受入如來惠と説て爾前當分の得益を許したり、若し此の事が泡沫に歸したならば但し妙法蓮華經皆是眞實と説きたる經文も無益なりと答へたるが、その皆是眞實と説きたる所以は此は是れ今昔相對し迹門を爾前の未顯眞實に對して且く皆是眞實と説きたるのて有る、本迹相待の時

門は仍未掃迹の教として未だ久遠實成本地難思の境智の妙法を説き顯されれば是則未顯眞實の分域を得た者て有る也、其の未顯眞實の所以は法華經の開經無量義經に阿含經より從淺至深して華嚴大乘の四十餘年の得益を擧て、佛答るに未顯眞實の言を以てした、此の言に對して迹門を已顯眞實と説きたるのて有る、迹門が未顯眞實の分域を得たる所以は涌出品の中に於て彌勒菩薩が釋尊の御身の上を疑て云く、如來悉多太子たりし時釋氏淨飯大王の御殿を出て出家し伽耶城を去ること遠からず大約廿里計りの所の菩提道場にて成佛し、乃始めて四十餘年說法教化して年月を經過し在りましたのて有ると問を發した其所で壽量品に來至して佛答へ玉ふには、一切世間天人及び阿修羅衆よ其許達は皆一同に今此釋迦牟尼佛釋氏淨飯王の宮殿を出て伽耶山城を去ること遠からず二十里計の所菩提道場にて三菩提を得たりと謂へるが、我れは實に成佛してより已來已と説れたり、宗祖曰く此の我實成佛と云ふ文は壽量品已前の迹門爾前の諸經を未顯眞實と破迹したる經文

に非ず哉と判じたる妙判也

是、故、記、九、云、昔、七、方、便、至、誠、諦、者、言、七、方、便、權、者、且、寄、昔、權、若、對、果、門、權、實、俱、是、隨、他、意、也、此、釋、明、知、迹、門、尙、云、隨、他、意、也、壽、量、品、皆、實、不、虛、天、台、釋、云、約、三、圓、頓、衆、生、於、本、迹、二、門、一、實、一、虛、也、記、九、云、故、知、迹、實、於、本、猶、虛、也、迹、門、既、虛、不、可、及、論、文、此、の、五、行、六、字、は、天、台、妙、樂、の、釋、の、文、を、引、て、破、迹、顯、本、し、た、る、判、て、有、ま、す、倍、て、此、の、文、を、講、ず、れ、ば、迹、門、の、未、顯、眞、實、な、る、こ、と、は、天、台、妙、樂、兩、大、師、の、釋、に、赫、乎、と、釋、し、て、有、る、是、故、に、妙、樂、の、記、の、文、の、九、の、本、六、十、云、く、本、疏、の、昔、の、七、方、便、と、云、ふ、文、よ、り、下、誠、諦、と、云、ふ、文、に、至、る、ま、て、を、消、釋、せ、ば、七、方、便、を、權、と、言、ふ、た、の、は、且、く、今、昔、相、待、し、て、昔、の、仍、未、開、權、の、教、を、權、と、呼、び、今、の、開、權、顯、實、の、教、を、實、と、稱、し、た、者、て、あ、る、若、し、本、迹、相、待、し、て、迹、の、因、門、を、本、の、果、門、に、對、す、れ、ば、今、昔、二、經、の、權、實、は、俱、に、是、れ、隨、他、意、方、便、の、權、教、也、上、宗、祖、此、の、記、の、文、を、判、じ、て、曰、く、此、の、記、の、釋、は、明、か、に、知、り、ぬ、迹、門、の、

説を尙隨他意の權教と云ふ文也(私曰昔の教に圓詮を許さず、仍未掃迹の教なるが故也)法華文句の九の卷壽量品の疏に天台大師釋して云く、一實圓頓の法華接縁の衆生に約して迹本二門に於て相待すれば、迹門に於て一實と云はれたる因益も本門に於ては一虛なる者也上、妙樂記の文九の卷末十二此の文を承て釋して云く、故に知りぬ今昔相待して迹門を實と稱したるも、本迹相待して論ずれば迹門に實と云はれたる因益も本門に於ては猶ほ虚因なり上、宗祖念釋して云く、迹門の因果の二益は本門に於て虚談なること論に及ぶ可からず、と破迹したる妙判て有ます

但、皆、是、眞、實、者、若、望、本、門、迹、雖、是、虛、於、一、座、内、論、虛、實、故、言、本、迹、兩、門、俱、眞、實、也、例、如、迹、門、法、説、之、時、譬、說、因、緣、説、本、迹、二、門、共、於、一、座、一、無、不、聞、知、故、名、爲、顯、記、九、末、十二、云、若、方、便、教、二、門、俱、虛、因、門、開、竟、望、於、果、門、則、一、實、一、虛、本、門、顯、竟、則、二、種、俱、實、已、此、釋、意、者、本、門、未、顯、以、前、對、本、門、尙、以、迹、門、名、爲、虛、若、本、門、顯、已、迹、門、佛、因、則、本

門、佛、果、故、天、月、水、月、成、本、有、之、法、本、迹、俱、顯、三、世、常、住、也、文、此、の、十、行、五、字、は、開、迹、顯、本、一、部、唯、本、本、迹、不、二、の、絕、待、妙、に、約、し、且、つ、台、祖、内、經、の、邊、を、探、て、釋、を、引、て、隨、義、轉、用、し、所、弘、の、妙、法、の、法、華、を、判、じ、た、る、文、て、有、ま、す、今、此、の、文、を、消、釋、せ、ば、但、し、迹、門、を、皆、是、眞、實、と、稱、し、た、る、は、今、昔、相、待、し、て、昔、の、教、を、權、と、し、今、の、經、を、實、と、し、た、る、跡、外、の、迹、門、を、指、し、て、眞、實、と、稱、し、た、る、の、て、有、る、若、し、此、の、跡、外、の、迹、門、を、本、門、に、對、望、す、れ、ば、迹、門、は、因、果、俱、に、是、れ、虚、説、な、り、と、雖、も、唯、一、佛、乘、の、法、華、所、説、の、一、座、の、内、の、虚、實、を、論、じ、た、る、事、に、て、頓、開、迹、顯、本、し、ぬ、れ、ば、跡、外、の、迹、の、因、果、が、開、せ、ら、れ、て、本、門、跡、内、不、思、議、の、本、迹、と、な、る、が、故、に、本、迹、俱、に、眞、實、の、妙、法、と、成、る、の、て、有、る、其、例、を、擧、て、申、さ、ば、迹、門、の、法、説、の、會、座、に、於、て、譬、說、因、緣、説、を、聽、く、機、の、熟、し、た、る、者、を、不、待、時、の、人、と、て、如、優、曇、華、時、一、現、耳、の、譬、説、を、聞、き、若、我、遇、衆、生、盡、數、以、佛、道、の、因、緣、説、を、聞、て、開、悟、す、る、人、あ、る、が、如、く、本、門、未、説、已、前、跡、外、迹、門、の、人、の、如、き、も、本、地、久、成、の、説、を、聞、く、機、の、熟、し、た、る、者、を、不、待、時、の、人、と、て、迹、門、の、法、席、に、於、て、密、に、本、門、久、成、の、説、を、聞、て、增、進、

損生の益を蒙る者有り、然れども此の密聞と云ふは爾前の秘密教の偏圓の法互に知らざる秘密とは不同にして、述門の人も本門の人と同一席にて一佛乘の法を聞いて皆一佛乘の人となりて、述門の開權顯實本門の開顯本を一同聞知せざるることなき故に、密聞の人も顯聞の人となして虚實を論じ、其所で開述顯本し竟れば述因述果は開せられて本因本果となり、因果の二種俱に眞實となりたる也、と判じたる文なり

○配九云若方便教と云ふ文より顯三世常住也に至る五行十字は、妙樂の記の文を引て破述及び開述顯本して佛界緣起の眞の十界互具の妙法を宣示顯説したる妙判て有ます、今引れたる記の文の七句十字を消釋せば若し昔の方便の權教所説の法門を論ずれば、昔は因果の二門俱に隨他意の權法なれば虚妄て有る、述の因門に於て開權顯實し竟つて昔の教に對すれば因益の一は實なれども、本の果門に對望すれば因益の一實も一虚となる、本門に來至して開述顯本し竟れば、則し佛外無常の述因述果が開せられて、本門常住の本因本

勤考無敵法の言草なり、如何となれば述門佛因則本門佛果、故と云ふ二句の妙判は、影略互現の文なることを考へざるより本述一致の邪解を發したるのて有る、佛外述門の無常遺滅の佛因を以て本門常住不滅の佛果と接ぎ合して、無始本有三世常住の十界を仕立んとするは、木に竹を接ぐよりも甚しき無敵法の仕業て有る、此の様な仕業をして本述一致良、由二於茲二とは思ひ切たる邪解なり奇々怪々の魔談なり、日講よ死して靈知あらば聞き給へよ、所開の述門の方に於ては佛因を舉て佛果を畧し、能開の本門の方に於ては佛果を舉て佛因を畧したるのて有る、常識ある學者ならば實に見易き判断て有る、今此の文の意を講せば、若し本門能開の妙法を説き顯し己りぬれば、佛外の述門の述因述果が開せられて本門の本因本果と成るが故に、無始本有の佛界の本の天月と無始本有の九界の述の本月と本有の妙法と成て、本述俱に三世常住と顯るゝ也、と云ふ妙判の文なり、然るに日講は述門當分の不堅固無常の述門が開せられず、其儘本門堅固常住の佛果

果となりて、則し因果の二種俱に眞實なりと云ふ釋なり已、宗祖此の記の文を判じて云ふに、此の記の文の釋の意は、述の因門は爾前に對し因益を一性實と稱すれども是れは本門未説前の申分て有る、此の一實の因益も本門に對すれば尙ほ述門の因果を名て虚妄と爲す、若し本門に至て開述顯本し己りぬれば述門無常の因果が開せられて本門常住の本因本果となるが故に、佛界本果の天月と九界本因の水月と此の十界俱に無始本有事常住の妙法と成て、佛界の本の天月も九界の述の水月も俱に三世常住と顯われたる者也、と云ふ文てあると判じたるのて有る、偕て此の文に就ては難詰の諸君に説明しをかねば成らぬ大事の法義が有ます、爰て諸君の存知の天台宗袋擔の大方者の一人たる一致者流の日講が此の判に就て申には、**一實則至本門、可無一實、至本門、得皆實不虛、述門、一實此其源由也、**本述一致良由於茲、と斯く申されたり、隨分無

を顯すと云ふは佛學界不通の愚談て有る也

一切衆生、始覺名三述門、圓因、一切衆生、本覺名爲本門、圓果、修、一、圓因、感、一圓果、是也、此の六句卅四字は衆生の始本二覺に約して本述を判じたる文て有ます、偕て此の文を講ずるに先き立ち説明し置く事が有ます、開述顯本の法華經の所證の法門には、一切衆生の身軀に本住法の本覺と自證法の始覺と云ふ二法が具足して有る、其本住法の本覺と云ふは、十界の一切衆生の色心の身軀なる者の本覺と云ふは、十界の一切衆生の色心の身軀なる者は無始本有常住にして本來覺の開けたる身軀て有ると談するのが本住法の本覺と申すのて有ます、次に自證法の始覺と云ふは、衆生が我が智慧を以て我が身体の本住法の本覺なる事を證して始めて覺り得たるを自證法の始覺と申すのて有ます、弁別易く言へば、我が此の身の無始已來の始末を我れと悟り知るを云ふのて有ます、今此の六句三十四字の文を消釋すれば、一切衆生の身軀には無始本有の始覺を具足して有る、此の始覺を名て述門九界の圓因と言ふ(圓因とは本門)、一切衆

生の身軀には無始本有の本覺を具足してある、此の本覺を名て本門佛界の圓果と云ふ（圓果とは本果）、偕て斯の如く一切衆生には始覺本覺の正因の事の佛界を具足し有りといへども、緣因了因の修行をせねば本具の佛界を顯す事はならぬ、我は無始本有の本因妙と本果妙とを備へたる佛なりとて、貪著五欲の振舞のみをなして了因の信念と緣因の口唱の修行なければ、報應各三事常住の正因の佛界を顯はし得る事はならぬのて有る、何れの處にか天然の釋迦自然の彌勒有らん耶と釋したるは此の事有る、其所て法華玄義の釋籤七卷十一の修一、圓因一、圓果一と引き玉ひたるは修顯得轉とて信念口唱の修行の功德力に願て佛界を顯し得たる事を引證したるのて有る、今其の證人を舉て申せば、我が本師釋尊が五百塵點劫の往昔先佛の教化に従て本因妙の一の圓因を修行して本果妙の一の圓果を感得したるを修一、圓因一、圓果一と申すて有ます、偕て此の一の圓因と云ふは、教法には漸漸等の化機化法の八教の多種が有ます、其多種の八教の中の一

の圓教を指して一圓と申したて有るが、此の一圓に於て普述本の三經重々の淺深勝劣が有る事を知らねばならぬ、如何となれば昔の所説の圓教は仍未圓權とて仍ほ未だ開權顯實せざる轉外の圓教なれば極めて淺劣也述門所説の圓教は開權顯實して轉内の圓教なれども、仍未拂述とて仍ほ未だ破述開述顯本せざる圓教なれば淺劣て有る、獨り本門所説の圓教のみ破述開述顯本し本時の自行の圓を説き顯したる圓教なれば、深勝の妙法て有る也、偕て博識碩學の聞へ有る一致者流の日講の如き述門の佛因述門の圓因等の述の名を呼びたるに或ひ、此の妙判の文を以て本述一致を判じたるなりとは、一致と一轉との差別も知らず、且つ本述の名には理事本述、理教本述、教行本述、權實本述等の種々の名ある事も辨別せず、述門の佛因とは無始本有九界の水月を述門と稱し、又述門の圓因とは無始本有の衆生の始覺を指して述門と名けたる者なり、二も無く三も無く一向に一致とさへ言へば宗義に叶ふと思ふは愚痴なり、眞如實相の妙理すら普述本の重々の淺深勝劣

有り、況や事の本迹に豈に勝劣淺深無からん耶、子路人之れに告ぐるに過ら有るを以てすれば即ち喜ぶと云ふ、世間普通の學者すら聞て即ち喜ぶ、況や出世間豪邁の學者の日講我が歴代の先哲、汝に過らを告る事數々なり必定喜れたるならん、聽講の諸君よ、此の妙判の但皆是眞實者と云ふ文より下の妙判は、宗祖開述顯本の經旨を示し、一部唯本本迹不二總持不思議の妙法、及び無始の九界に無始の佛界を具し無始の佛界に無始の九界を備へたる眞の十界互具一念三千本門事觀の御本意を宣示顯説したる、本宗大切の妙判にて、日講の魔魅に誑されぬ様に堅く注意せねばならぬのて有ります

如是ノ談ニ法門之時迹門爾前若本門不顯者不出六道何出九界耶此の五句廿六字は第四重の問難の妙判の惣詰の文て有ります、偕て此の如是の二字は上みの破述顯本及び開述顯本の文を承て如是と申したて有ます、是の如く破述顯本し開述顯本したればこそ、迹門爾前の迹因迹果無

常の因果も開せられて、本因本果の常住の因果と成て本迹俱に三世常住の報應各三の佛界と顯れたる者なり若し本門顯れずんば述門爾前の人手近き六道生死の巷すら出る事能はず、何ぞ遠遠なる九界生死の巷を出て寂光の本國土に至らん耶、と結歸統一したる妙判で有ます、已上本席にて十法界抄の講談も結講に成りました（完結）

失 題

簞 堂

○榮利勢譽は、自己を暗所に導びき、無間の苦痛を感せしむ、故に大道の光明に接觸することが出来ない。世人が地位に嘯り付きたがるが、一度大觀すれば、その地位なるものは、頗る怪しい危険なものである。

○宗派心に驅られて、開諍を好み、自の職分を忘る、は、愚の極點であるが、教義の尊重安心の歸着等中正の見地より宗派心あるは、寧ろ探るべきことである。

而も自は教義の尊重を忘れ、自己の安心を定めずして明に宗派心に驅られ、他と開諍を好み、自己が教義の

誤謬、邪僻なる淫詞迷信を鼓吹しながら、尙且、正法の力によりて、平和の實現を誓願するなど、告白する者あれば、これ人を救ふ自を認ゆるものと謂へられ。

○清白なる精神行為は、宗教家の本領である。自己の理想行為が、誤謬なることを認識したる時は、直ちに改換するがよろしい。この改換は耻辱にあらずして、光明である、舍利弗日蓮迦葉が、佛陀に隨順したるが如き捨邪歸正は、佛教歴史の光彩である。末世の僧侶が教團の誤謬を指摘して、自己の確信を天下に表白しながら、尙地位と寺祿に戀々として、その確信を埋没せるは、この人宗教家にあらず、また僧侶として、世人の風上に置くべきでない。

○宗教は信念が生命である、宗教の眞價を感得する時は、解脱の域に進みたるである。而もこの時はたゞ、宗教の必要を感じたるなり。されば、進んで、宇宙人生の覺悟その物の、意義も語らざるべからず。由來日本國民は宗教意識の公正なる發達を心掛けて居ら

○基督教國民の陋劣なる、黃白人種の障壁を築き、迫害亂暴を他國民に加へて、自己の利益を壟斷せんとする醜行は、一視同仁の教義に、動搖を來し、久しく被へる偽善の幕は墜されて、新たに清鮮の教義を容れんとするの機運に向へり。

○基督教を奉ずる國民を文明人といひ、異教を奉ずる國民を、野蠻人といへる空想は、昨日の夢となり、根底なき基督教の道徳は、劣等なるその教義と俱に壞れて、國際道徳にも、巳人の理性にも、一大變動を來すてあらう。從來は道徳でも、律法でも、基督教に胚胎したる傾きがあるが、今や業に壞れたり。佛教の光明は、漸次輝くべく、而して十萬の圓顛、自宗の教義を解する抑も幾人かある、寥々たるのみ、他は油蟲にあらざれば、木偶、蒼牛救済の大任を帯べる僧侶、自省して大勢の趨く所を觀察せよ。

○行學の二道を勵める僧は、供養すべし、座食して道を求めざる油蟲は撲滅すべし。これに依りて佛陀の光明は實現せられ、蒼牛は救済せられてその所を得るに

ぬ。稻荷不動大師等雜多の佛神に、現生利益を祈るが如きは、明かに宗教意識の公正ならざるを自白せるものである。

○人は順潮期にあれば、無我夢中に、樂天主義に過ぎ行くが、不幸打續き逆境に呻吟する時になると、恐怖の念に驅られ、九星易占に魅られ、厄除開運除病方位の爲に、雜多の淫祠に祈願することになる。この時に處して、或はず悲まず、嚴然として人生の行路多難なるを觀破して、心靈の光明を發現するを得ば、これ宗教の眞價を識る人である。

○今の世は、偽善陷穢等餘罪惡を行ひつゝあるが、これ之を證するものは、國際道徳である。巳人の交際また之に習ひ、辭柄を巧妙に、平和人道を揚言しながら、裡には利己主義の慾望を充さんとす、蠱策詭を婉曲といひ、直截なる行爲を目し、頑固といふ、非を枉げて是といふ。倫道の眞面目ならざるは、これ謗法なり。宗教家の覺醒すべき秋は、今を指いて、何れの時ぞ。

いたらむ。

千葉縣本宗各教區布教師に東す

報舟

予は未だ各教區布教師の高咳に接せず、故に如何なる名論卓説を持せらるゝや、毫も存せず、然れども均しく顯本門下の一員として、聖日蓮の主義を世に宣傳せらるゝといふに至りては、異論なかるべし矣、而して其布教方法や名論卓説は如何なるにせよ、予は少しく諸師に語らんと欲す、乞ふ爰時予が言に耳を藉せ今や時代の趨勢は、漸く物質界を脱して精神界に何物かを求め安全の余地を得んとしつゝあるは、吾人の警言を俟たず、されど諸師よ學術智識發達せる現今の社會に對して、伽藍佛教や、葬祭佛教や、時靈佛教やに依りては到底不可なるのみならず、吾人も又満足せざるべし、見よ七里法華今日の狀態は如何ぞや、曰く氣息奄々として孤城落日の如く、やうやく覺束なくも寺院と靈簿とに依りて其の生命を維持し、草山の所謂、山家村里の愚俗を誑かして、以て我活計のなかだちとなすに酷似せずや、否らずや、是れ豈に諸師か講究一番すべき好箇の問題に非ずや、此の問題を語るに先た

ち爰に先決問題として、

第一吾人青年に平素不快の念を與るものあり、そは多くといはざるも、一部の相當位地あり優力の境に住せらるる諸師にして、深く布教に従事せず、而して偶々青年有志のものありて事を爲さんとするに當り、此等の諸師は評して例の空言放語のみと、一喝の下に貶斥せらる、而かも悲哉、青年有志の輩は勢ひ此等優力者即ち先輩諸師に待つと多きを以て、一ト度諸師の叱咤に逢ふや折角の所志も往々涙を呑んで無中止せざるべからざるに至るは事實也、されど青年僧侶も又全く罪なしとせず、相當辨あり學あり識あり筆あり、社會に堂々一、端腕を振へるものにして、只經濟の事にのみ汲々として、日夜身支を勞流し、或は養蠶家となり或は養蠶種紙販賣者となり、或は餘裕あるものは團基雜談に耽りて、その多くは聖祖の所謂畜盜法師となり貴重之光陰を空費するに至りては、已に向上の一路を失ひ、大法宣傳の天職を忘るゝものと謂ふべし、豈に慚愧の至りに堪へんや、彼の老人輩一部が常に青年の爲す無きを嘆ふもの豈に所以なしとせんや、之れ青年者流が大に反省自覺を深くすべき所のものなり、而して予は又更に一言老諸師に語らんとす、諸師常に曰く

教上に及ぼす弊害や至大なりと可謂矣、之れ豈に冷笑に付して止むべきものならんや、抑も諸師の悉知せらるゝ如く、各教區に布教師を設けられたる所以の者は何ぞや、之れ固より偏頗固陋なる布教を爲さしめんが爲に非ずして各自宗門の爲めに協心戮力、統一的な布教の興隆を計らしめんが爲めなるべし、何すれや鬮牛角上の小争を事として斯の大理想大天職を空ふすべきならんや、省察せよ諸師、夫れ諸師の版圖たる七里法華の地たるや、東九十九里に面し、西は慕張に連り、南は木更津に至り、北は武射田に及ぶ、總の上下廣袤七里、寺院は四百を算す、その雄大なる他に比類なし聞く備前に備前法華ありといふも、彼れ恐くは我の大なるには及ぶまじ、されど地の大のみを以て誇るに足らず、宜しく信仰の大を以てすべきなり、仍ち我七里法華の如き優勢の地に處せらるゝ諸師、一度事を爲すとせんか、如何なるとか爲し得られざらんや、是泰山を挾んで北海を越ゆるの類に非ずして、長者の爲に杖を折らざるの類也、孔夫子の所謂、勞は中ばにして功は之に倍せんとは、夫れ此等を言ふ歟、

本年四月東京博覽會を櫻雲深き、東台山上に開設せらるゝや、日宗東京附近一部の寺院は相連合して、彰義

ア、吾等は老ひたり、青年よ、前途多望なり、夫能勉辦焉と、然り、如何にもこの言の如し、吾等はこれを大牢の滋味の如く難有く拜受すと雖、反て之が爲めに精神を殺がるゝかの感なくんば非ず、又曰く、愁ひ布教の云々といふも吾等數年の實験に依るに、到底七里法華の如き病膏盲に入れる教域は、自然に其革新の機を待つより外なしと、是れ青東野人の言として聞くべきも諸師の言としては斷じて之を容るゝ能はず、并は吾等としては飽く迄も教域革新の責務を有すればなり、ア、有力なる先輩諸師、時に吾等が狂妄の讒言をも容れ、宏量の愛と指導とを給はらば幸甚なり、

ア、各教區布教師よ、諸師は吾等の平素最も敬意を表し、其布教上に於ける行動に就きては、實に感佩の外なしと雖、要するに餘りに自我の發展に過ぎたる邊あらずや、又た自他教區の意志の疎通を疎碍するかの感なき能はざるものあり、例せば他教區の布教師自教區に來りて布教を爲すものあらば、宛も自己の金城を占掠せられしかの如くに思ひ、甚しきに至りては其の講演の如何を論せず強ちにこれをせしめるものありと聞く、その狹量卑劣なると一笑にだも償せず、故に予は容易く之を信せざるも若し事實如斯者輩ありとせば布

隊資塔の側に布教所を設け、日々演説及び施本を爲し各宗中にも其功績少なからずと傳ふ、況んや一舉して七里法華の事を爲すに於てれや、如何に況んや諸師は身既に布教師たる重任を負ふ、宜しく奮勵警策して身軽法重、死身弘法、層層其の天職に忠實ならずんばならず、縣下にしても、千葉、東金、本納、大網、茂原、木更津、姉ヶ崎、佐倉等皆樞要の布教地也、故に諸師幸に協心戮力して布教方法を講じ之れが實行に着手せんか、萎靡せる信仰は立所に生氣を帯び來りて、瞬間に其の面目を一新せんこと必せり矣、人あり或は云はん、縣下は布教よりも財政急務なりと、然り財政急務ならざるにあらず、然れども思へ吾人の第一義諦は布教なり、宜しく毅然奮進して布教に盡くし各自の天職を完ふせよ

ア、諸師よ、因循姑息の布教策は既に時代遅れなり、宜しく進んで大に改良發展の道を講せざるべからず、此儘にして打捨て置かんか、羝羊の風に孕み石橋の雨に朽つるとあるも、何の目か靈域の革新を得ん、思ふて此に至れば悲憤痛嘆に堪へざるなり、願くは賢明なる縣下各教區布教師諸彦、吾人の進言を待つ迄もなく速かに大會議を促し其の方法を討究論議して、これが

の頃より故ありて中絶せしを、同寺現董中村乾信師は今回大法會の總務なれば、態々同地に出張して懇談せられたる結果、舊例の如く奉納することを快諾し、又これが運搬に就いては古例に依り大金澤區信徒の取扱に係るを以て是れ亦交渉の上賛同を得、不日同區金城寺大塚住職指揮の下に六十餘名の信徒古風の方式に依り大塔婆の材木を運搬し來るといへば、その當日は定めて非常の群衆なるべしと思はる、尙ほ大法會委員の氏名及び担任を示せば

- 總務 中村乾信 吉田純賀
 會計 小高榮郁 山本日悟
 布教 今井日省
 接待 竹内無著 廣部永真 井口善叔 佐野日保 萩原會雪
 法要 津田察圓 齋藤立靜
 給養 岩崎會真 高石快成 山縣真瑞 鶴澤純貞
 庶務 伊保内教守 加藤會圓 大塚無偏 鈴木日王 佐野泰晉 朝倉弘元
 ●大綱佛教婦人會 本山部長僧正野口義禪師は去る

十時閉會せり
 今回府下の水害に就いては、大覺青年會員たる西村治一郎君 同喜一郎君は晝夜を厭はず東奔西走し非常に盡力せられ、率先して同情袋を作製し、山内及び近末の僧侶に計り檀信徒並に市中一般にこれを配布するととなり、九月十三、十四の兩夜は部署を別ちて午後六時より十一時すぎまで京都市内各所に道路救済演説を催しぬ、その一部は鈴木、墨、森、三好の諸師と西村治一郎君等、他の一部は銀井、川崎、増田の諸師と西村喜一郎君等にて、十五日夜は又田上、墨、松平、銀井、鈴木、川崎、増田、森、松田、西村喜一郎等の眞俗一隊を爲して市内隈なく遊説したり、さればにや同情ある聽衆續々彬出し、集金高拾參圓余に達しぬ、中には一圓紙幣を義捐して姓名を名乗らざる人あり、車夫下婢にして尙ほ五錢十錢を喜捨するあり、此等は眞に同情の涙とも謂ふべし、かくて募集せる金品は合計五十一圓余、白米四石、衣類數百點に達したれば、其筋の手を経て府下の加佐、天田、船井の三郡内の被害地に夫々寄贈するとなりたり
 又先般來當地教學財團基金募集に就ては本山信徒總代瀧野喜八郎、吉川平兵衛、秋山嘉兵衛の三氏東西に奔走して檀信徒の勸募に非常に盡力せられたれば、勸募着手の時期後くれたるにも拘はらず、その成績佳良なるを得たるは偏に諸氏の功勞なりと謂ふべし(京都鈴木孝碩報)

八月中用務の爲め住職地たる千葉縣大綱町蓮照寺に歸錫中なるが、標題の如く同地方檀信徒の婦人會を組織せられ、去る九月八日(舊八月朔日)その發會式を舉行せり、その概況を聞くに、當日同寺本堂に於て會員一同禮拜を厳修し、夫より君が代の奏樂ありて開會を宣し、會の綱領發表、祝辭、講話、役員選舉あり、終て會員一同に茶菓を饗し、各種餘興福引等あり、豫定以上の入會ありて爲めに諸般の設備に影響を來したる程の盛況を呈したりといふ、今同會の概則を擧ぐれば
 (綱領)一、信仰を勵む事 一、家庭の圓滿を計る事 一、慈善を心懸る事
 (會則摘要)○年二回大會、○年齡十五歳以上
 ○會費金二錢、○講話會、○餘興 抹茶、活花 音曲、福引等
 同會には野口僧正を始め萩原僧都、板倉通猛等の諸師盡力せられ、目下會員九十余名ありといふ
 ●京都通信 先便報道せる如く九月十二日午後七時より總本山妙滿寺に於て京都大覺青年會の催はしに係る府下水害地慰問使報告演説會を開きたり、その演題と辯士は
 開會の辭 幹事 西村治一郎
 同情袋 墨 照玄
 懇同報告 鈴木 孝碩
 同 銀井 幹升
 にて、來會者數百名、同情袋數十個の寄贈を得、午後

教學財團公告

教學財團基金寄附申込表(第十二回)品川支所取扱

- | | | | |
|-------|-------------------|---------|-------|
| 金拾圓 | 京都市下京區轆轤町妙祐寺兼住 | 坪永 | 日監 |
| 金五拾圓 | 京都市高辻東洞院久遠寺檀家 | 唐橋 | 在正 |
| 金拾貳圓 | 勝田 甚吉 | 井上 | 平吉 |
| 金六圓 | 吉津治良右衛門 | 堀江 | 菊 |
| 金五圓 | 吉津保次郎 | 三好 | 君江 |
| 金五圓 | 栗尾與左衛門 | 坪永 | 勝俊 |
| 金貳拾圓 | 坪永 八重 | 青山 | 善七 |
| 金百五十圓 | 京都總本山寺中、法光院檀家 | 廣部與三右衛門 | 依 |
| | 福井縣丹生郡志津村 | 森川茂左衛門 | 又十郎 |
| | 本行寺檀家總代 | 水野村又十郎 | 野村又十郎 |
| 金壹圓 | 靜岡縣庵原郡松野村妙松寺檀家 | 望月 | 幸吉 |
| 金六拾錢 | 同縣同郡同村 同寺 | 天野 | 茂十 |
| 金六拾錢 | 同縣同郡同村 同寺 | 佐野七兵衛 | |
| 金拾圓 | 千葉縣長生郡日吉村妙圓寺代理 | 阿部 | 和一 |
| | 同縣同郡東郷村達成寺檀家(第二回) | | |
| 金五圓 | 藤乘 貞助 | 堂井重次郎 | |
| 金四圓 | 御須 定吉 | 地引嘉四郎 | |
| 金參圓 | 深山惠十郎 | 藤乘 和助 | |
| 同 | 石井 武吉 | 白井 林藏 | |

統一

第百五十三號

明治三十年二月二十四日 第三種郵便物認可(毎月一回)
明治四十年十月十五日發行第一號百五十二號(十五日)
明治四十年十一月十五日(毎月一回十五日)發行

發行所
編輯人
印刷人
山井村
北野木
印刷所
印刷所

發行所 東京淺草區南橋(根岸貯金庫)統一團
山町四十五番地(第一二一九)